三、方言学

芳賀綏

1

昭和廿九年、国語学会は創立十周年を迎えた。十年前、それまで日本における方言研究の中枢となって来た日本方言学会が発展的解消をとげてから、後を承けて方言研究の振興をはかり、研究成果の発表機関となって来た国語学会の歩みを思うならば、戦後、いちじるしい発展のうちに十年間を歩んで来た方言学にとって、この年は、まことに記念すべき年であったと言わなければならない。

あたかもこの年、方言学界の元老、東条操教授は古稀を迎えられた。暮もせまった一日、神田如水会館に催された祝賀の集いは、出席者百人を数えて、斯学の指導者としての教授の功績をたたえ、長寿を希うとともに、方言学の前途を祝福するの気にみちみちた。

しかも、この年に、学界にとって記念すべき二つの大著が世に送られたことは、東条教授の古稀を飾るにこよなくふさわしかった。廿九年の学界の初頭をかざった「日本方言学」は、編者東条教授の序説執筆を中心に、金田一春彦・藤原与一・林大・柴田武の諸氏が、音韻・文法・語彙・調査法の記述に、各々、その造詣と個性とを生かして、過去五十年、東条教授とともに歩んで来た日本の方言学に、壮麗な結実をもたらしたもの。まことに、日本方言学の真面目を示す金字塔との評にふさわしい。行きとどいた諸索引（都竹通年雄氏作製）を添えたことも、更にこの企画を完璧のものとするにあずかった。

方言学界が廿九月度の歩みを終えようとする頃、教授古稀の祝からほどなく上梓された東条教授の「標準語引・分類方言辞典」は、先年刊行の「全国方言辞典」と表裏相補い、一体となるべきもので、これまた学界が久しく待望したところであった。更に、「全国方言辞典補遺篇」を併載、巻頭には平山輝男氏作製の「全日本アクセント分布図」、巻末には「方言集書目抄」・「標準語による五十音全索引」を添えるという、至れりつくせりの内容である。われわれがこの辞典から多大の恵みを受けるに当っては、この辞典最大の協力者大岩正仲氏の功もまた銘記されなければならない。

ここ数年の間、東条教授の数十年このかたの大業が次々と完成を見るのは、この道につらなる研究者一同のよろこびにたえないところ。この二つの意義ある出版は、学界にとって記念すべきこの年を、一層意義深いものとしたのであった。

2

以下、斯学関係のさまざまの動きにふれる順序であるが、まず

地方の展望からはじめよう。あらかじめお断りすべきは、原則としては活字となった業績に限定し、口頭による研究発表を割愛させていただくことである。また、管見、重大な粗漏・

誤謬があるときは慎しんでお詫びしなければならない。

北から順に、津軽では、弘前大学の此島正年氏が、国語史研究と並行して、鋭い観察と穏健な筆で方言研究を進めておられるが、廿九年には、「青森方言の敬語法」（弘前大学「人文社会」第五号）をものされた。弘前には、日野資純氏も赴任され、此島氏とたずさえての研究は、やがて、青森県方言の全貌を明らかにするであろう。氏の「方言における文法研究の問題点」（国語と国文学、五月号）は、新しい方法の展開を求められている方言文法の記述について、氏の抱く体系を示したものであった。なお、弘前では、松木明氏「弘前語彙」の刊行があったと聞く。

岩手県では、多年コツコツと研鑽を重ねられた小松代融一氏の仕事が、ようやく実を結びはじめた。単行本「平泉方言の研究」は、氏の「岩手方言研究」第一冊として世に送られたもの。綿密な調査と記述によって、類書のほとんどなかった岩手県の方言研究に、明るい灯をともした。続刊が待望される。

南奥羽では、山形大学の浅野健二氏が、「仙台俚言考(下)」（文芸研究、16号）を執筆された。

ちょっと飛んで群馬県へ移ると、池上二良氏が中心となって、雑誌「国語研究」が出された。ささやかな体裁ながら、その創刊号は、東条教授の寄稿をはじめ、充実した内容を示す。群馬から東京へ移られた中沢政雄氏も稿を寄せて、長年研究の一部である「群馬方言の終助詞とその分布」をものされた。井口実氏は「群馬県碓氷郡方言の助動詞」を執筆、主宰者池上氏は、氏の出身地、お隣の信州へ目を向けて「長野県方言のガ行四殊活用動詞の音便形について」の精緻な論考を示された。

長野県の方言学界も活潑に動いている。さきに東西方言境界線に関する調査を公けにされた牛山初男氏が、「中部日本におけるサ行四段動詞のイ音便形の分布」（信濃、七月号）を書かれたのは、語によって、また地域によって、複雑な出入りを示す形だけにありがたい。同氏の「推量助動詞ずら・ら等の分布」（同、六月号）も興味深い問題で、浅川清栄氏「お手玉の方言」（同、七月号）は、県下の分布を手びろく採った。

山梨県では、巨摩高校社会科研究会「奈良田の共同調査報告」（「山梨教育月報」三月号、四月号）が出て、中に、今井文臣氏の「言語の特殊性」があり、かねて注目されていたこの方言の一斑を伝えた。

裏日本へ抜けて越後へ出ると、飯持隼一郎氏が、変らぬ精進ぶりで、一端を「佐渡の音調」（佐渡、八月号）に示された。雑誌「佐渡」八月号の「佐渡方言」特集は注目される。東条操・新村出両元老をはじめとして、地元・中央併せて十余氏の執筆から成る。山本修之助氏「佐渡方言の分布」は概観に便利。

福井の佐藤茂氏の、年来の調査成果も、次第に活字化されているが、この年は「福井県の言語調査(3)—敬語について」（福井大学学芸学部紀要、第三号）があった。

東海地方も多士済々の活躍ぶりで、数年後の隆昌は期待すべきものがあるが、なお各氏とも満を持して放たれないのか、山田達也氏「アクセント型の決定——（尾張方言）——」（名大言語学談話会会報、第二号）があったほかには、活字となったものの少いのはさびしい。三重県に入ると、富森盛一氏「三重県名張方言集」の刊行があった。

京言

葉の重鎮、楳垣実氏が、お隣大阪へ移られた後の京都では、奥村三雄氏の活動が最も目立つ。「京都方言の研究」（京都学芸大学学報）は「方言分布区画の可能性を考えつつ」と副題されるあたり、野心のうかがわれるもの。同氏は、「対馬方言の性格」（国語学、第十七輯）で、さきの九学会連合対馬調査参加の収獲を示されたが、これまた「言語史研究の一方法」を提示した力作。

和歌山では、雑誌「和歌山方言」の相次ぐ刊行が目ざましい。村内英一氏は、「動作態の表現」（十一月号）に次いで、「二段動詞残存に関する調査について」（十二月号）瀞峡・北山峡をさぐられた与味ある結果を報告。水口清氏の「山林用語」（十一月号）その他、久世正富氏「コレシカヨイ由来記」（十一月号）、与田左門氏「糸取唄と布織唄」（十月号）などもあり、貴志正造氏の「『仰山』と『非常に』弦」（十月号）は、大阪の前田勇氏とも呼応（十二月号）。大阪からは楳垣実氏も「紀州ことば」を十、十一、十二月と連載。和歌山在住中研究を重ねられた造詣の深さを示された。

前記水口氏の「和歌山県植物方言集」は特筆すべき労作で、秋田・淡路に次いでの第三作。全国に目の行きわたった内容は価値が高い。

大阪の前田男氏が、口頭に論文に、当るを幸いの活躍ぶりは年を逐うて目ざましく、「連母音〔ai〕の音訛について」（国語学、第十八輯）は、藤原与一・金田一春彦両氏の所説につけて、〔ai〕の変化過程についての氏の見解を述べ、転訛の諸相の「分布図の読み方」を示した。先年の「母音の無声化」と言い、全国地図に目を注いでの力作である。「大阪の酒落言葉」（大阪学芸大学紀要人文科学、第二号）は、同氏薬籠中のもの。

〃京都の楳垣さん〃が〃大阪の楳垣さん〃になられて、遠くのものは、まだ何となくトまどいを感ずるが、さしも八面六臂の氏も、大阪では、帝塚山学院英文科主任の多忙に押し切られて、雑誌「近畿方言」の鉄筆をふるわれるいとまもなく、この年を送られた。思えば、楳垣氏の献身的努力を中心とした近畿方言学会は、戦後方言学界の花形であり、「近畿」の名は冠しても堂々たる全国的存在として、学界に多大の寄与をなして来た。機関誌「近畿方言」の休刊により、その動きが如実に全学界に伝わらなくなったのは、さびしい限りである。しかし、「東条操先生古稀祝賀論文集」の計画など、同学会の活動はようやく再開されようとしている。新しい年度の同学会に期待し、楳垣氏をはじめ、会員各位の御健闘を祈ろう。

近畿から、山陽路を岡山へ進むと、虫明吉治郎氏「岡山県のアクセント・その一」（岡山県方言の研究、第一輯）の刊行という収獲があった。或はオートバイで県下をかけ廻り、或は瀬戸内の小島をへめぐり、辛苦の末に成った著書だけに、体系的記述も詳密、殊に、甲・乙両種アクセントの境界を精細に見きわめようとした努力は貴重である。刊行されるであろう続篇には、一層掘り下げた考察が示されるものと期待される。本書は、一地方の方言を記述した刊行書としては、北の小松代氏の「平家方言の研究」と並んで、本年度における収獲の双璧というべきであろう。

次の広島からは、河野亮氏「広島弁私考」（国語学、第十八輯）が送られた。ととのった記述は音韻・語法にわたって、克明な観察を反映している。ほかにもベテラン多士済々の中国で、研究の

活潑な動きははるかに察せられるが、その割に活字になったものに接すること少かったのはさびしかった。

四国へ渡ると、高知の土居重俊氏が、四国きっての活動ぶりを示されたが、中でも、高知全県にわたるアクセント踏査の成果の一環である「高知県幡多郡のアクセント」（国語学、第十六輯）は力作であった。愛媛県では、杉山正世氏「渭南方言区の設定について」（愛媛国文研究、第三号）が貴重な収獲。宇和島市付近と隣県幡多郡との方言の類似を綿密に検討し、それらの或る範囲を一方言区として統合することを提案した。良心的な、手がたい論考であった。近来、氏が中心となって、この県の方言研究が着々進みつつあるのはよろこばしい。

戦前からのアクセント研究家、山名邦男氏は、日本音声学会近畿支部の中心となるかたわら、四国へも足をのばして、「四国方言のアクセント（その一・その二）」（音声学会会報、第84・85号）を執筆、各地アクセントの動向を報告された。

九州では、従来研究の少かった佐賀県で、小野志真男氏の「佐賀県方言区画概説」（佐賀大学研究論文集、第四集）が出て、県下の全貌をつかみ得るまでになったのが大きな収獲だった。北端福岡からは、加来敬一氏「福岡県方言の語彙について」（北九州国文、三月号）が出、対して南端鹿児島には上村孝二氏「鹿児島県下の表現語法覚書」（鹿児島大学文理学部紀要、第三号）があった。

熊本から大阪へ移られた原田芳起氏は、「九州方言に現われた弱母音化通則」（音声学会会報、第86号）をものするなど、九州時代の考察の成果を、次々とまとめはじめておられる。

以上ざっと見渡したところで、地方における研究の動向を整理するならば、戦後十年、この間活動をつづけて来た諸家の労作が、ようやく、活字――特に単行本となって実を結びはじめていることが注目される。しかも、単なる語彙集ではなくて、語法・音韻――特にアクセント――についての体系的な記述に、すぐれたものが見えているのは、戦後の方言研究の主流的傾向を反映したものといえよう。

こうして各地のベテランが考察の整理と記述に沈潜する一方、各地に新しい研究団体誕生の報も次々と聞かれ、新進研究家の活躍により、着々新生面が開拓されて行っていると思われるが、惜しむらくは、それらの多くが、中央や、他地方にまで知られないことである。ちなみに、国語学会を通じての発表一つをとってみても、昭和廿六年には、機関誌発表八編、研究会発表八人であったのが、近来はめっきり少くなって、半減に近い。少くとも表面的には、一種の沈滞期ででもあるかのように感じられるのはさびしい。

各地における研究を促進するとともに、それら相互の、また地方と中央との交流をはかり、研究の成果を中央の学界へ反映させることは、国語学会としても力をつくすことが必要ではなかろうか。各地に国語学会支部の設置を促進することも一つのよすがとなろう。

3

中央に帰って、研究機関や研究家の活動を眺め、また雑誌・放送などの動きをかえりみよう。

日本における方言研究のキー・ステーションとなった観のある国立国語研究所地方言語研究室では、前年からひきつづき「敬語の社会心理学的研究」を進めたが、年度末の三月を以て、岡崎市への臨地調査を一応完了した。また一方、同研究室が全国四十七名の地方調査員に委託しての実態調査も年々成果をあげているが、廿九年度の調査課題は「各県の方言概観のための調査」であった。いずれまとめられて、刊行されるであろうが、各県方言の記述的研究として今日の水準を正しく反映するものとなろう。

国語研究所の活動とともに、戦後の方言研究に特色を示すものとして、言語学と隣接諸学この提携による共同研究がある。九学会連合廿九年度大会では、日本言語学会から、柴田武氏が共同調査「能登」の一環として「能登方言の分布」を、岩井隆盛氏が共同課題「移住」に答えるものとして「言語の特徴と集団の出自」を、それぞれ発表され、また、金田一春彦氏の「能登の言語」も、発表後一年を経て活字となった（九学会年報「人類科学」VI）。同連合では、三十年度から奄美大島の共同調査に着手することを決定、言語学会から服部四郎博士ほかの参加が伝えられた。つとに諸学界が着目しながら、諸般の情勢から今日まで実現できなかった同島の実態調査は、方言学界にも大きな収獲をもたらすであろうこと、期して待つべきものがある。

更に南の琉球に対しても、かねて学界諸方面の関心が向けられているが、宮良当壮博士の日本方言研究所では、この年も琉球語講座がつづけられた。なお、宮良博士には「風土と言葉」（民俗民芸双書）の著作があった。

この年、中央諸研究家の論文では、アクセントに関するものが圧倒的であった。中につき、服部四郎博士が、「国語研究」（国学院大学国語研究会発行・第二号）に執筆された「音韻論から見た国語のアクセント」は、さきに博士が国学院大学国語研究会で講演された内容に、更に補訂を加え活字化されたもの。アクセント研究における音声学的立場と音韻論的立場との峻別を説き、音韻論的立場からするアクセントの体系的把握に新しい見解を示された。この論文の描く波紋は諸方面に及んだが、特に諸方言アクセントの記述研究に対しては、今後とも示唆影響するところ大きいものがあろう。

ややおくれて、金田一春彦氏「東西アクセントのちがいができるまで」（文学、八月号）が出た。同趣旨の内容は、廿六年の国語学会で同氏によって公開講演され、当時すでに大きな反響を呼んだもの。服部博士の〈原始日本語アクセント〉説以来、絶えて現れなかった、甲・乙両種アクセントの関係についての仮説も提出した野心作で、解決のカギを能登半島諸方言のアクセントに求め、〈乙種アクセントは甲種アクセントが変化して出来た〉とするが、方言アクセントの研究・アクセント史の研究に一時期を画する論述であった。

方言アクセントの記述的研究には、全国踏査を絶えずつづけておられる平山輝男氏の「福井県嶺北方言の音調とその境界線（その2・その3）」（音声学会会報、84・85号）がある。精細な臨地調査により、十三年前の同氏の調査結果と比較考察されたが、アクセントの複雑な分布と微妙な推移とを示して、その実態把握が

待望されていた同地方方言であるだけに、貴重な記述である。また、平山氏は、東京都立大学方言研究会を指導し、新進研究家を育成されるとともに、各講演会などを通じての啓発活動にも力をつくされた。右研究会の会員島田健氏には、諸地方臨地の成果の一つとして「方言アクセントの一型化の傾向」（音声学会会報、85号）の執筆があった。

国語研究所にあって地方言語の研究を主宰するかたわら、全国各地方言の調査や記述に精力的な活躍ぶりを示しておられる柴田武氏は、「山形県小国町方言の音韻とアクセント」（国語国文、十一月号）をものされた。特にアクセントについてはアクセント核のありかについての氏独自の見方がうかがわれたが、やがて、全国諸方言のアクセントに対して新しい見方が展開されることをも予想させ、反響が期待される。

音韻・アクセントの記述・考察が進むのにくらべ、語彙に新味のある研究がとぼしい中にあって、長尾勇氏「地蜘蛛考」（国語学、第十九輯）は出色であった。手広い調査にもとづく、キメ細かな言語地理学的考究は、年来さかんな、周圏論適用への批判的考察と関連して興味を呼んだ。

諸雑

誌の中で、国語学会機関誌「国語学」、日本音声学会機関誌「音声学会会報」等が、例年通り、方言に関する諸論考を掲載したことは、これまで記述して来た通りであるが、雑誌「解釈と鑑賞」六月号が「方言の日本地図」を特集したのは、この雑誌には珍しい着目であった。東条操氏の「国語における方言の位置」を巻頭に、「方言の変遷とその背景」（江湖山恒明）「方言のアクセント」（平山輝男）「方言文法」（都竹通年雄）「生きている方言・死んだ方言」（山崎久之）「方言文学」（大野茂男）「方言区画論」（大岩正仲）「方言研究の展開」（日野資純）等が〝総説篇〟ともいうべき内容であったが、項目の選定になお一工夫あってもよかった。〝各説篇〟というべき「方言の実態」は、東北・北海道（芳賀綏）関東（中沢政雄）中部（大田栄太郎）近畿（楳垣実）中国（虫明吉治郎）四国（土居重俊）九州（吉町義雄）南島（宮良当壮）という分担であったが、地方によって資料に新旧の差があり、十分今日の水準を示したものとはいえなかったのは、啓蒙誌の性質上、やむを得ぬことだったかもしれない。

「言語生活」が「ことば風土記」をはじめ方言に関する記事を毎号のせたことは例に変らず、その六月号は、京阪語の問題をめぐって、興味ある特集であった。そのほかでは、「日本民俗学」「民間伝承」誌の方言に対する関心も常に変らず、「NHK放送文化」（七月号）が「九州方言あれこれ」を特集、「知性」が、おくだ・やすお氏「東北のコトバ」を連載したのは異色であった。

教育関係誌では、近藤国一氏の「標準語教育に関する質問書」（「実践国語」二月号）が口火となって、同誌六月号は、方言と標準語教育の問題をめぐって、広く諸学者の意見を求め、特集を行なった。同誌のほかでは「カリキュラム」「国語教室」などが方言への関心を示した。

放送では、NHK放送記念日特集番組の一つ、十一元放送「ことば風土記」がにぎやかだった。司会は金田一春彦氏と青木アナのコンビよろしく、全国十一ケ所のナマの方言を紹介、鹿児島

（上村孝二）熊本（秋山正次）高知（土居重俊）広島（藤原与一）松江（広戸惇）大阪（楳垣実）名古屋（芥子川律治）金沢（岩井隆盛）東京（金田一春彦）仙台（佐藤喜代治）札幌（石垣福雄）と、各地のベテランが解説に当った。

こうして、中央での動向を見渡せば、「全国方言辞典」につづく「日本方言学」・「分類方言辞典」の完成によって、方言研究は、これまでの進路に大きなしめくくりをつけ、現に立つ水準を鮮明にした。国語学会十周年は、方言学界にとっても大きなエポックとなり、ここに一つの頂点は示された。と同時に、新しい歩みは次第にはじめられつつある。前年において、服部博士の「方言研究私見」をはじめ、幾つかの論考によって示された理論的反省への方向は、この年に入って、前記した服部、金田一・柴田氏等の諸論文にも示されて、一段と押し進められた。年末から三十年初頭へかけて、日本言語学会東京例会が、金田一、平山氏等を中心に「方言境界線」の問題をめぐって討論を重ねたのも、この流れに沿うものであろう。これらの動きの中から、新しい理論・方法が樹立されるならば、東条教授が古稀の賀に当り「東条方言学を超えた研究を」と教えられたところにも副うもの、方言研究の前途は更に明るいであろう。

――東京大学大学院学生――